

一六世紀前半対馬宗氏の権力抗争からみる三浦の乱

大矢野範義

【キーワード】①対馬 ②宗氏 ③三浦の乱 ④倭寇 ⑤朝鮮王朝

0. はじめに

三浦とは、一五世紀前半に朝鮮王朝が、倭船の停泊地として朝鮮半島南部に指定した三つの港（浦所）のことであり、薺浦（乃而浦）・富山浦（釜山浦）・塩浦を指す（【地図】参照）。三浦には、日本からの使節など多数の倭人が入港し、居留する人々（恒居倭）も多数現れる。恒居倭の多くは、対馬島民であり、その活動は境界人としての側面を強く持っている。

周知のとおり、一五一〇年（永正七・中宗五）、貿易拡大を望む対馬宗氏（【系図】①参照）と、それを制限したい朝鮮王朝との利害対立の結果生じたのが「三浦の乱」である。

るより、講和交渉を開始しようとし、同時に交渉の開始を待たずに急速に撤退を始めた。言うまでもなく、朝鮮はこの講和には応じず、四月十九日、慶尚道都元帥（軍総司令官）柳順汀を指揮官とする中央から派遣された鎮定軍の総攻撃により齊浦は陥落、倭軍は二九五名の戦死者を出して対馬へ撤退した。中村氏は、攻勢局面にあった四月九日に、倭軍とりわけ恒居倭が婦女子・貨物の撤退を急速に開始したことを指して「異様」と述べている⁽⁶⁾。ここに問題の鍵があると思われる。

三浦の乱の二年後、一五二二年に壬申約条が締結されるまで、対馬と朝鮮との通交関係は断絶状態になった。朝鮮側が提示した条件は、①恒居倭の廃止。②齊浦のみを開港。③島主歳遣船を従来（癸亥約条）の五十隻から二五隻へ半減。④島主特送船・興利倭船の禁止。⑤歳賜米・豆を二〇〇石から一〇〇石へ半減。など、生業の大部分を朝鮮関係に依拠する対馬にとって大変厳しいものであった⁽⁷⁾。それだけに、このことは対馬島内で乱の過失を巡って対立を引き起こす原因になり得たと考えられる。

中村氏の理解によると、乱の首謀者は特使宗盛明、および島主代官宗盛親（国親⁽⁸⁾）そして宗盛弘の三名であり、島主義盛（初名、盛順）は「これにひきずられて兵船を出し、辺将らの排除を目的として、三浦倭人の暴動を援助したものであった」とし、義盛の主導性は否定している。しかし、中村氏が国親を首謀者と理解する際に根拠とした『実録』の記述は、主に朝鮮王朝側に捕えられた倭人平時羅（平次郎）なる人物の証言である。彼は朝鮮側の動静を探る島主の密偵のような人物とみられることから、その信憑性については疑いが残る。島主が乱の責任を国親になすりつけようとした策略の存在が疑われるのである。

本稿で注目する点は、倭軍が突如として撤退を開始したのが、首謀者と目されてきた宗国親の釜山渡航直後のことだった、という点である。この事実が国親を挑発者とみることに於いて有力な反証となる。

これらの問題を考える際に無視できないことは、乱前後の島内権力の推移を明らかにされた荒木和憲氏の研究⁽⁹⁾である。荒木氏によれば、以前から島主義盛は守護代国親と政治的競合関係にあり、三浦の乱が失敗に終わった後、その政権基盤は縮小していった。それに対して、守護代家の国親・盛廉父子は乱後においても権益を維持し続けていることが述べられている。ただし、荒木氏も国親が乱の首謀者である、とする中村氏の説を踏襲されている⁽¹⁰⁾。これは乱の首謀者に結果責任が帰結せず、乱に消極的であった義盛に責任が帰せられたということになり、矛盾がある。乱の失敗は貿易権益に依拠する島内勢力にとつて大きな損失であり、乱の首謀者は、敗退の政治責任を鋭く問われることになったと考えるのが論理的である。通説にはこのような論理的矛盾がある。

義盛が主導して乱を引き起こしたため、その失敗の責めが義盛の政権基盤の縮小をもたらし、国親は乱の結果責任を問われなかった、とみるのが合理的ではないだろうか。

ここで判断の分かれ目になる問題は、乱の途中で国親が釜山・齊浦に現れると、倭軍が有利な戦局にもかかわらず、直ちに全住民・貨物の撤収が開始されたという事実である。国親は乱の反動により、居留地が危険な状態になるという認識に立つて行動していたと捉えられる。彼は挑発について慎重な態度であったと考えるのが合理的と思われる。

本稿では、三浦の乱の経過を辿りつつ、先行研究において三浦の乱の主要人物であるとされている盛明・国親（盛親）・盛弘・義盛（盛順）の四人それぞれの乱の渦中における動向を跡付けながら、通説を再検討してみたい。

1. 先行研究における問題の所在

中村栄孝氏が三浦の乱の主導者を国親及び、盛明・盛弘の三名であるとされた際に根拠とされたのは次の史料である。

【史料1】『中宗実録』十二卷、五年（一五一〇）八月丁未（二四日）条

倭人平時羅供曰、……本島特送宗盛明、以新島主函書請受事、留住釜山浦、齊浦時、釜山浦頭倭等、以齊浦僉使之侵劣恒居倭人事、告訴於宗盛明、盛明、以此通書于島主、而上京還浦時、釜山浦恒居頭倭等、亦来告訴、宗盛明。亦以朝廷接待、不如旧例、遂含憤還島。勸島主發兵入寇、殺害僉使、島主曰、今朝鮮欲致奠亡父、使臣將至。吾当將此意、告于朝鮮、或治罪或遞職。宗盛明不聽其言、而潛與盛親作謀、故島主不能禁止矣。將帥則盛明為首將、盛親為亞將、老屯都老為第三將、分領兵船作賊事聞之、而其余節次、未詳知之。

これは倭人平時羅の証言をもとに書かれた『実録』の記述である。二重傍線部によると「首將」＝盛明、「亜將」＝盛親、「第三將」＝老屯都老（노둔노トウンドノ＝能登殿の音とみられる）＝能登守＝宗盛弘の以上三名が首謀者であるとされており、島主義盛（盛順）の積極的な関与は記述されていない。

これについて、中村氏は「対馬島の伝統的な政策からすると、朝鮮に対しては、武力を行使することなく、外交交渉によって、しばしばその要求を貫徹しており、このような非常手段によったことは前例を見ない。新島主宗盛順が、その実行をためらったというのは、おそらく事実であろう」として平時羅の証言をほとんどそ

のまま史実としてとらえている⁽¹¹⁾。

平時羅は、かつて朝鮮から書契を托送されて対馬にかえったまま、消息不明であった人物である⁽¹²⁾。倭人が三浦の乱の戦いで敗れて対馬にひきあげて四ヶ月後、朝鮮との往来の断絶していたころ、再び朝鮮に渡ってきたところを捕えられている⁽¹³⁾。そして、対馬島に再挙の企てがあるという情報を伝えている⁽¹⁴⁾。【史料1】はその時期のものである。

平時羅は、他の倭人が解放される際の『実録』の記事⁽¹⁵⁾にも「平時羅等、則実聴島主之言、為請和出来、而托云報変、皆飾詐謀、窺覘我虚实者」とある。すなわち、平時羅等は実は対馬島主の意を受け、和を請うために遣わされた人物で、「報変」も詐謀であり、朝鮮の実情を窺いみるのが任務の、いわゆる「密偵（スパイ）」であると疑われたのである。したがって「不可軽許還島、以貽後悔」つまり、簡単に対馬に還すことを許せば、後悔を残すとされ、抑留されたままであった。

このように、朝鮮側では平時羅を島主義盛の息が掛かった人間とみていた。これを踏まえると、彼は島主を利用する証言を行う人物であったと考える余地がある。ただし、その後の日朝交渉で朝鮮側は平時羅を疑いつつも、彼の証言で名前の挙がった国親の引き渡しを対馬に要求している⁽¹⁶⁾。しかし、これはあくまで交渉術としての外交カードの切り方とみられ、必ずしも事実認識とは一致しないという点に留意する必要がある。

ここで、島主と国親との関係を考える際に手掛かりとなるのが荒木和憲氏の研究である。

荒木氏は近年、材盛・義盛島主期―盛長島主期の宗国親発給文書を整理・分析された。その上で、材盛・義盛期には国親の発給文書が本来の守護代発給文書の様式から逸脱する傾向にあり、当主固有の権限であるべき知行宛行権・安堵権を徐々に侵食していたことを指摘された。すなわち、三浦の乱発生前後における島主義盛

と島主代官国親の間には、政治的競合関係があったということである。

一五一〇年に乱が対馬側の敗退に終わったのち、一五二〇年に没するまで、義盛の権力基盤は縮小の一途をたどる。その後、島主権は本宗家を離れ、仁位郡主家の盛長、そして盛弘の子盛賢（将盛、豊崎郡主家）へと移っていく。荒木氏によれば、国親は盛長期にこそ権力拡大を抑制され、守護代本来の職権への回帰を余儀なくされたものの、次の盛賢期に至っても対馬において厳然たる実力を維持し続けていたという。三浦の乱の失敗と、壬申約条の締結による否定的影響を最も受けたのは義盛だったと言っても過言ではないだろう。

以上のような先行研究を踏まえたとき、三浦の乱は従来言われているような守護代宗国親の主導ではなく、島主宗義盛の主導であったという仮説を立てることができる。すなわち、守護代家との対抗関係にあった島主が政権浮揚を企図して三浦の乱を引き起こしたが失敗し、結局、権力基盤を失っていたという仮説である。

この仮説を検討する上で、特に重要なのは乱における国親の動向である。乱の途中、国親が釜山浦・齊浦に現れてから、対馬側の戦略が攻勢から撤退へと変化する。すなわち、国親は講和と撤退戦の指揮を執るために渡航したとみられるのである。この国親の撤収活動こそ乱の首謀者を考える上で最大の焦点となる。

いま一度、三浦の乱の経過と、各人物の動向を整理し、その意味を再検討する。

2. 三浦の乱にいたるまで

三浦の乱に至るまでの大まかな経緯を概観しておく。この問題については、概ね中村氏や村井氏らの成果に従う¹⁷⁾。

乱より以前、一四九〇年代ころから日本から朝鮮への輸出货量が増加⁽¹⁸⁾したが、朝鮮王朝の財政が逼迫し、呑み込みきれなくなりつつあった⁽¹⁹⁾。日朝の対立の原因は、日本側の貿易意欲の高まりにあった。三浦には大量の日本側貨物が集結されていたはずであり、乱後の貿易途絶は対馬島内の対立の原因になったとみられる。

一五〇六年九月二日、朝鮮国王が燕山君から中宗へと交代したのを契機として、三浦の倭人に対する抑圧が強まっていった。辺境の守令や辺将の人選が嚴重化され、日本使船の接待や三浦周辺の防備について、これまでの規定や旧約が勵行されるなど、倭人に対する統制が強化されたのである。

このような統制策は対馬島主との充分な外交交渉が行われなままに展開したため、三浦恒居倭人の動揺を招き、事態はかえって悪化してしまった⁽²⁰⁾。三浦倭人と朝鮮王朝との軋轢が次第に強まり、たびたび衝突事件が生じるようになっていったのである。

一五〇八年一月二日の加徳島倭変⁽²¹⁾、一五〇九年三月二〇日の甫吉島事件⁽²²⁾、同六月齋浦居住倭人による示威行動⁽²³⁾、そして、一五一〇年二月三日の倭人殺害事件⁽²⁴⁾などである。

前掲の【史料1】によれば、このような三浦の窮状は現地の「頭倭」によって特使宗盛明に「告訴」され、まずは書状によって島主（義盛）に伝わっている。また、盛明自身が漢城（ソウル）に上京した際に受けた朝鮮王朝の待遇が旧例の如くでなかったことに対して、憤りを覚えて対馬に帰ってきた。そして、島主に「発兵入寇、殺害僉使」を勧めたとある。盛明の勧めに対して義盛がどう対処したか（制止したか否か）は後ほど改めて検討するが、いずれにせよ、三浦恒居倭の不満が高まっているという情報に、対馬で真っ先に接したのは島主義盛であった。

3. 三浦の乱の経過

三浦の乱の経過について、①攻勢期。②転換期。③終局。の三期に分けて整理する。

①攻勢期（四月四日～八日）

対馬側の攻勢は「塩浦・釜山浦・東萊・齋浦・熊川・巨濟及各浦」とあるように、三浦のみではなく、巨濟島などの島嶼部にまで及ぶ広範囲かつ大規模なものであった⁽²⁵⁾。

《齋浦》

一五一〇年四月四日、齋浦恒居倭酋大趙馬道、奴古守長等が武装した倭四五千余名を率いて城に攻勢をかけ、齋浦僉使金世鈞を射た⁽²⁶⁾。

四月五日、倭軍が熊川城を包囲した。

【史料2】『中宗実録』十一卷、五年（一五一〇）四月丙申（十一日）条

対馬島敬差官済用監正康仲珍馳啓曰、今月初五日、倭兵圍熊川城、京通事等、從門隙窺見、彼為大將者、乃去年特送貞長。熊川県監韓倫、知京通事等、與貞長相知、令相語問來寇之由。貞長答曰、釜山浦僉使李友曾、改造公廨、役恒居倭、甚於編氓、此前古所未有。且前日分大、中、小船給料、友曾則皆以小船尺量。

去年將此意、告于礼曹、礼曹聽而不聞、國家亦不罪友曾。我等所以至此。通事申自剛答曰、齊浦、熊川何故耶、貞長又答曰、齊浦僉使、則恒居倭、欲採蠶出婦、請射官、僉使称造船無暇、不許、使水使、捕殺無罪倭四名。熊川則或減給糧料、或遷延不給、且禁恒居倭出入通市。以此島主命我等伐釜山浦、齊浦、巨濟等処、不得已來、此非我意也。

京通事（通訳）が門の隙間から外を窺い見ると、倭軍の大将は去年特送使をつとめた「貞長」であった。通事と貞長が旧知であることを知った熊川県監韓倫は来寇の理由を尋ねさせた。すると貞長は、釜山浦と齊浦の僉使の横暴を挙げたあと二重傍線部のように語っている。つまり、「島主（義盛）が我らに釜山浦・齊浦・巨濟等を攻めるように命令したので、やむを得ずやって来た。これは私の意志ではない」と。

四月六日、金世鈞が生け捕りにされた。そして、釜山僉使李友曾の首が熊川に至った賊によつて示された⁽²⁷⁾。また、熊川県監の韓倫が熊川城を捨て逃亡するも、捕らえられ、昌原府に置かれた⁽²⁸⁾。こうして熊川城は倭人の居するところとなった。

四月八日、朝鮮軍はさらなる苦境に立たされていた。その要因として、熊川の西北の地が險阻であることや、水田の泥濘など、地理的に戦闘に向いていないこと。倭賊は負けるとすぐに引いてしまうことから、首級を挙げられていなかったことが『実録』に記されている⁽²⁹⁾。

《釜山浦》

四月四日、倭賊が釜山浦城を攻め落とした⁽³⁰⁾。

四月八日、倭賊二百余名が釜山浦から東萊県東平里人家へ侵攻（来掠）するも節度使柳繼宗、東萊県令尹仁復の挟み撃ちにあい一旦敗走したが、なお攻勢を保った⁽³¹⁾。

《巨濟島》

この他にも、倭軍は巨濟島周辺の朝鮮側守将にも襲撃をかけている。島嶼部における大規模な攻勢は四月九日まで記録されている。

四月四日昼頃、倭船「千隻」が来寇し、永登浦で朝鮮軍を包囲し、しばらく交戦した。倭人の半分は主勿島へ、もう半分は内地へと向かった⁽³²⁾。

四月五日明け方、倭軍の大船五隻が河清里に来寇し、朝鮮軍と交戦した⁽³³⁾。

四月八日、倭船四十余隻が来寇し、永登浦を陥れた⁽³⁴⁾。

四月九日、倭賊二〇人余が助羅浦へ来寇した⁽³⁵⁾。

以上のように、乱の当初四月四日から八日（島嶼部では九日）にかけては、齊浦においても釜山浦においても、概ね倭軍側が優勢のまま推移していることがみて取れる。

【史料2】貞長の証言から、島主権限の発動による対馬・三浦を挙げた大規模攻勢だったことが窺われる。

② 転換期（四月九日～一〇日）

【史料3】『宗左衛門大夫覚書』⁽³⁶⁾

【表】三浦の人口動態（中村栄孝『日鮮関係史の研究』上巻（吉川弘文館、1965年）より）

年代	齊浦		釜山浦		塩浦		計	
	戸	口	戸	口	戸	口	戸	口
1466	300	1200余	110	330余	36	120余	446	1650余
1474	308 (11)	1722	67 (2)	323	36 (1)	131	411 (14)	2176
1475	308 (11)	1731	88 (3)	350	34 (1)	128	430 (15)	2209
1494	347 (10)	2500	127 (4)	453	51	152	525 (14)	3105

※ () は寺院数

永正^(一五)（かのへむま^(一〇)）の年……

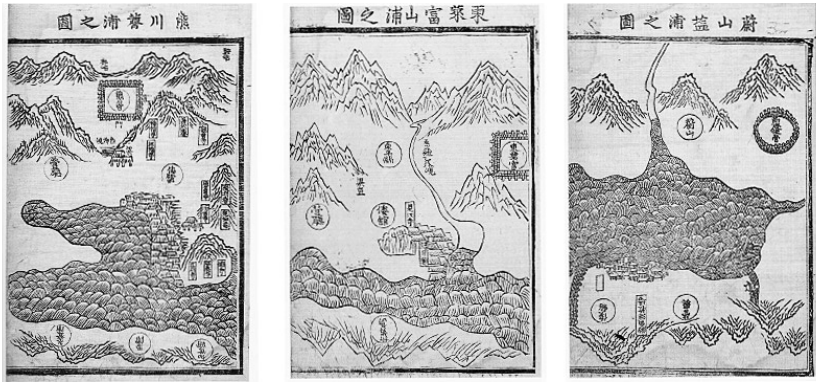
一、又つのかみ殿^(津守・撰津守・宗国親・盛隆)、齊浦に御下候、四月九日にて候、

四月九日、宗国親が朝鮮（釜山）に渡航した⁽³⁷⁾。李友曾が討たれたことに驚いた国親が慌てて現場に駆けつけたものと思われる⁽³⁸⁾。

同日、「以船載恒居倭人及家財、向海中而去」とあるように、釜山浦恒居倭人の財産も含めた避難行動が始まる⁽³⁹⁾。倭人は追撃を免れるために朝鮮軍の軍船を尽く焼き払った。このように倭人が避難行動を開始したことにについて中村氏は「四月九日前後から、現地の倭人の動静に異様な動きが見えてきた。」と評している⁽⁴⁰⁾。中村氏が「異様」とされたのは、戦局が倭軍有利であるにもかかわらず、国親来航と同時に撤収が開始されたことにあるだろう。国親は勝ちに乗りようとする倭軍を抑えて、撤収へと方向転換させたものと考えられる。

また、四月九日以降のものともみられる動向に、齊浦、釜山浦の糧料雑物を加徳、絶影等島に運び出したこと。釜山浦恒居倭は妻子や家産を船に搭載し、齊浦の賊倭と連合したことが『実録』の記述から判明する⁽⁴¹⁾。

三浦には多数の住民（非戦闘員）がいた（【表】参照）。また、当時の対馬側の貿易意欲の高さを考えれば大量の貨物が集積されていたはずである。これらを直接対馬に送り届けようとするれば、多くの時間を費やすことは避けられない。



【図】「熊川齊浦之図」「東萊富山浦之図」「蔚山塩浦之図」『海東諸国紀』所収
(東京大学資料編纂所蔵)

加徳島や絶影島は三浦近海の無人島であり、倭軍はこれらを人員・物資の一時避難場所としたものに違いない。

国親は四月一〇日から講和交渉をもちかける(後述、【史料8】)が、避難開始は九日だったことから時間稼ぎの交渉だった可能性がある。国親は間もなく齊浦に現れるが、こちらでも朝鮮軍の前進を遅滞させる策略が実行されており、狙いは非戦闘員と貨物の撤収を図る時間稼ぎにあつたと考えられるのである。国親の渡航を契機として、乱の展開は大きく変わる。

③終局―朝鮮軍による総攻撃と三浦全住民避難―(四月一日～一九日)(図)参照

朝鮮側は、倭軍の優勢に対応するために漢城から援軍を送り込んできたが、兵力の集中には時間を要し、倭軍の遅滞戦術もあって、本格的な反攻は四月一八日まで遅れることになった。

《齊浦》

四月一八日、中央より熊川に朝鮮軍の増援部隊が到着した。

兵数は黄衡一〇〇〇、柳珥年一九〇〇、金錫哲二〇〇〇の、総勢四九〇〇にのぼる援軍であった。

注目すべきは倭人側の戦術に変化が見られることである。例えば、死体を道の傍らに多く並べる（「見賊陳屍道傍者多」）など、攻勢期には見られなかった、トリッキーな戦術がとられるようになっていく。朝鮮軍はこれについて「蓋欲使我軍見而畏怯也」と推測しているが、熊川の城を放棄したことを悟らせまいとしたのであろう。倭軍による非戦闘員脱出のために朝鮮軍の浦所への接近を遅らせようとした時間稼ぎの戦術と考えられる。

朝鮮軍が城に入ると城内はすでに空であり、賊は陣を城外に移していた。東・南・西の山頂から朝鮮軍の様子をうかがっていたが交戦し敗走した。

四月一九日、齋浦熊川での最終決戦が行われた。

【史料4】『中宗実録』十一卷、五年（一五一〇）四月己酉（二十四日）条

本月十九日未明時、分為三道、由陸路而進、右道水軍節度使李宗義、釜山僉節制使李備、率舟師分東西、水陸竝進、自早食時至午時、合擊力戰、賊先以老弱妻子載船、令驍勇軍、據險抗戰、向海濱北走。諸軍進薄急擊、則賊勢窮力屈、争舟而上。自相刃殺、及中矢溺死者、不知其數、全船覆沒者五隻、其余遁去者、無慮百余隻、斬獲二百九十五級。令新僉使李菴、開寧臬監姜終孫、守齋浦城、衡等領兵二千、還據熊川鎮。

一九日の未明、朝鮮軍は陸路の三方向に、海路も合わせた四方向から兵を齋浦に進め、倭人を挟撃した。倭人はまず老人や女子供を船に乗せ、「驍勇軍」のみで抗戦したが、海辺に向かい敗走した。沈んだ船は五隻。

自刃した者、矢に当たった者、溺死した者もいたが、それ以外を乗せた百余隻の船は逃げ去った。倭人の首二九五級を獲ったが、朝鮮軍には一人の死傷者も出なかったという。この日の戦闘の様子は次の史料からも窺える。

【史料5】『中宗実録』十一卷、五年（一一五〇）四月丁未（二十二日）条

本月十九日申時、軍官康允禧、郭翰等、自戰場馳報曰、左右道防禦使及兵馬節度使等、遣軍官分三運擊賊、舟師又至、四面挾攻、倭賊大敗、齊浦前水尽赤。斬獲之數、時不的知、大概四十余級。領軍為酋者、被擒幾尽、①兵仗器械、所得亦多。中矢溺死海中者、不知其幾、專船覆沒者三隻。我軍無一人死傷。其入戰節次及斬獲溺死之數、當隨後書啓。伝曰、崔林親見相戰乎、啓曰、臣在密陽、不得親見。上受常參。仍召見崔林、命詳陳入戰節次。林対曰、十九日辰時交戰、未時戰畢、我軍無一人死傷者。②康允禧、奪賊將盛親所乘馬乘之、左右道兵船、合計三十余隻入海。黃衡、金錫哲、柳聃年、分三道從陸道入攻。其逆戰者尽被獲、奔走乘船、中矢死者、不知其幾。賊船三隻沈沒、有欲乘船者、倭寇輒自相發劍擊臂。……

注目すべきは「兵仗器械、所得亦多」（傍線部①）との記述はあるが、非戦闘員に対する殺戮及び掠奪の記述が見当たらない点である。また、撤退の最終局面にあっても老人や女子供が在留しているにも関わらず戦死者は兵員のみである。残留していた老人・女子供は後衛の軍勢と協働しつつ、組織的に行動したと考えられる。そして、貨物の搬出は彼らによって実行されたものと推測される。

こうして三浦の恒居倭三千余人の大部分は殺戮を免れ、商品の大部分を保ったまま避難することができた

みられる。

また、【史料5】傍線部②に「康允禧、奪賊將盛親所乗馬乗之」とあり、盛親（国親）の乗っていた馬が熊川の戦場で敵將（康允禧）に奪われていることから、四月一九日以前に齊浦へ移動していたということができ、国親は三浦最大の人口を抱える齊浦の撤退戦をも指揮するため、釜山から移動していたものとみられる。

小括

乱の経過に関する要点をまとめると、左のようになる。

(1) 四月四日～八日、現地には国親はおらず、倭軍は他の人物（盛明・貞長等）に率いられて、大規模な攻撃を展開した。倭軍の優勢であり、釜山浦では李友曾が討たれた。

(2) 李友曾の首が対馬に届いた直後の四月九日、国親がまず釜山、ついで齊浦に現れ、直ちに撤収が開始された。国親は講和交渉を行い、朝鮮軍の進撃を遅らせる策略を用いた。

(3) 朝鮮軍の総攻撃は遅れ、四月一八日、熊川城を奪回したが倭軍はすでに撤退したあとであった。四月一九日、浦所への攻撃に際して、なお多数の非戦闘員がいたが、これら老人・女・子供は貨物とともに脱出し、後衛軍のみが死者を出した。

4. 三浦の乱前後における各人の動向

前章まで、三浦の乱の経過について時系列に沿って確認してきたが、ここでは乱の主要な人物とされている五人についてその動向を整理する。すなわち、三浦恒居倭の訴えを島主に報告して暴動を企画した盛明、盛明を使喚した島主義盛、現地に乗り込んで撤収を開始させた国親、撤収を援護して戦死した盛弘の四人である。

A. 宗盛明―特送使―

宗盛明は、乱の前年から特送使をつとめており、島主の近臣であったとみられる。

一五一〇年八月二四日、投降した倭人平時羅（平次郎）の証言【史料1】によると、盛明は新島主宗盛順（義盛）の凶書を請求する使いであった。受凶書人が亡くなった場合、その相続者が旧凶書を朝鮮に返し、改めて自分の名義のものと交換してもらう規定であり、この時は、前島主宗材盛が亡くなった直後だった。

浦所に到着した盛明は、まず、恒居倭から僉使の迫害をうったえられ、その情報を島主に送った。上京して浦所にかえると、さらに頭倭らの陳情をうけたが、みずからも、朝鮮政府の接待が旧例のごとくでなかったのに対し、はなはだしく憤りをいだいて帰国。武力に訴えて障害になっている辺将をのぞくことを島主義盛に勧めた。島主は、亡父宗材盛を祭るため朝鮮の使者が来るのだから、その機会に事情をうったえて、僉使の処分を請うべきであるといつて、この意見をとりあげなかった。しかし、宗盛明は、島主の制止を聞かず、ひそかに代官宗盛親らと、朝鮮乱入の謀を練っていた。『実録』によると乱の首謀者の三将の内の一人とされている。平時羅の証言には島主に有利な偽証が含まれる可能性があることは前述した通りであるが、島主が盛明を制

止したというのは事実だろうか。乱の最中に朝鮮に宛てた義盛の書契をもとに検証する。

B. 宗義盛（盛順）——対馬島主——

左に掲げるのが、義盛（盛順）自身の書契である。

【史料6】『中宗実録』十一卷、五年（一五一〇）四月壬寅（十七日）条

対馬州太守盛順、移書契于礼曹曰、

吾先祖貞盛以来、修永世立好、作東門之鎖鑰、今每歲差遣約船、述礼謝。雖然每事違例也。一、到浦日次、竝通文等之糧料不給事。

一、船具陸物諸緣等、是又違前例也。

一、上京糧料、竝月俸不賜事。

一、去戊辰之送使糧料、到庚午、三浦年来不下給也、剩遠国之使者等、於浦久淹留、故多餓死而已。如此條目、重重如前例。雖可告訴釜山浦之万戸、退朝到浦而後、貴国之公事、悉前例改換也。

一、釜山浦居住（人）倭人等、被燒炭、被採薪、被耕田島、是亦（非）古例、立新法也。

一、去年材盛、雖遣書契於浦而留置、剩今年数封書、空回給事、愧恨之至也。

如此之意、諸国之使者、欲致愁訴、而通事誘引、入万戸館時、万戸曰、日本之公事、謂不聽用。而通事即時打殺矣。加施彼通事之死骸、贈倭人以当料割肝膽皮肉可食云云、故雪此恥者也。且自殿下、如前例懇勸鄭重、而永好不替、是誠綸言也、只釜山浦令公一人、瞋眼持臂、而两国喪乱之義相企也。即体令公、以軍

兵相催列陳旅也。自今而後、若如前例、修永好結和親、則吾國彌結隣好、可為藩臣事、不可違背、若復如近年釜山浦万戸之公事相用、則猶挾攻戰調干戈、以触蛮之爭、不放晝夜而貴國可乱入也。因製短札以進獻、伏令此義、具可被達陛下尊聽焉。將此意、通書契者三。

この書契では、三浦倭人等の不遇を訴え、前例通りの待遇に戻してもらえれば、以前のように「可為藩臣」ことを伝えていく。もしそれが叶わず、近年のような待遇が続くのであれば、「則猶挾攻戰調干戈、以触蛮之爭、不放晝夜而貴國可乱入也」としている。

また、【史料2】「去年特送貞長」の四月五日の証言に「島主命我等伐釜山浦・齋浦・巨濟等処、不得已來、此非我意也」とある。すなわち、島主（義盛）の命令によってやむを得ず出兵してきた。私の意志ではない。」としている。義盛（盛順）が自身の書契で「不放晝夜而貴國可乱入」と恫喝していること、侵攻の尖兵だった貞長が「島主命」によって出兵したと言っていることから、島主が「制止」したという平時羅の証言は信用に足りないと考えられる。

さらに、時代は降って一五二二年二月一三日新島主宗盛長による約条改正・撤廢交渉の際に盛順（義盛）の名が挙がっている。

【史料7】『中宗実録』四四卷、十七年（一五二二）二月庚寅（十三日）条

以盛順^{（義盛）}庚午年唱乱之罪、告于日本欲致討、日本然之、発十島兵、助島主攻盛順、又擒首乱者二人、

この史料によると「盛順（義盛）の庚午年（一五一〇年）唱乱の罪（三浦の乱を主導した罪）を根拠に、日本（国王）に討伐したい旨を告げたところ、日本（国王）もそれを了承し、新島主盛長の盛順（義盛）討伐を助けた。また、乱の首謀者二人を捕えたという。

この日本国王使は宗氏によって用意された偽使であると考えられており、義盛討伐の事実を裏付ける史料は他に存在しない。当然、復権交渉のための方便が含まれている可能性はあるが、三浦の乱の「唱乱之罪」が義盛にあると盛長が主張している点は見逃せない事実である。

それでは、国親の行動はどのようなものだったのだろうか。

C. 宗国親（盛親）——島主代官——

宗国親（盛親）は、平時羅の供述によると三浦の乱時の「亜将」であり、乱の首謀者の一人とされている⁽⁴³⁾。しかしながら、乱の経過に照らすと次の二点が明らかになる。①乱の攻勢期には対馬に在島しており、前線に出ていない。②四月九日に国親が朝鮮に渡航すると直ちに和平交渉と同時に撤収が開始される。

前掲の【史料3】から、国親は四月九日に朝鮮に到着したことが分かる。盛明らが前線で挑発を実行し始めたとき、国親はまだその場にいなかったのである。国親が釜山に現れると直ちに撤収が開始され、和平交渉が申し入れられる。

四月一〇日、盛親（国親）による講和交渉が行われたことは次に掲げる史料から分かる。

【史料8】『中宗実録』十一卷、五年（一五一〇）四月乙未（十日）条

対馬島代官兵部盛親書契曰、

朝鮮與日本国、唇齒相接之口也。〔國〕由是〔義〕大明国之宣旨、其宣旨曰、兩國無二、而朝暮可通也、殊对州為西海之藩屏、兩國往來之咽喉也。從曾祖、定和親之約諸堅固也、此十年以來、每事換變也。殊去年四月、釜山浦令公〔季友曾〕下著以來、重重立新法度、对日本人企矛楯、雖差使船、尽小船、比人数記録、或上官人、各不遂上洛、從浦空帰來。又一年中之糧米、其年中尽不給、二三年之分壓留、上官人舟子劬勞、郡房長、亦姦曲與令公同心招乱也。以故①对州代主宗兵部少輔盛親為大將、数万兵船、乘渡釜山浦、令公父子兄弟、打殺勿頸掛門前、截捨者無限。今日令公頸、以早船渡对州、於東萊郡令公、無遺恨。欲述此義、昨日向東萊郡途中有軍勢、向日本人放箭。是故日本人、亦着城壘之門放箭、②因無遺恨、此旨達洛每事、每事再知先例、則天下院、宣有其證狀者、兵船即時引退也、無其義、則鯨吞蠶食、待日可見也。薺浦、鹽浦、多大浦、加羅伊山浦、(浦)被兵船船火同時、对東萊差使員、涓塵無恨、莫放箭、矣身制止之也。即時返辭、求之今日、欲趣停止也。

東萊県令尹仁復、答宗盛親書曰、交隣之義、古有其道。国家自祖宗朝、為貴邦对待甚厚、賜予亦多、交隣之道、至矣尽矣。足下不意、舉無名之兵、屠殺刃將、深入城下、縱火民居、焚蕩室廬、人受其害。僕以刃將、鎮守轅門、不可不敵、茲率軍士、與之相戰、此刃將職分、曲不在我。今見惠書、悉審示旨、鮮兵旋陣。但所論之辭、非僕擅斷、即達于朝。回啓在近、姑將待之。

この書契は、国親が東萊県令尹仁復に対して講和を持ちかけるために送ったものである。傍線部①によると、盛親(国親)は自らを「对州代主宗兵部少輔盛親為大將」と称している。理不尽な倭人統制策の最大の元凶と

された釜山令公李友曾は討ちとられ、その首は早船で対馬に渡ったため、「もはや遺恨はないので、この旨を都に通達し、すべての規定について先例通りにするという確約が得られれば、即時、兵船を引かせる」（傍線部②）という講和交渉であった。

この書契の記述だけを見ると、国親が大将として渡海してきて李友曾の首をとった如くであるが、実際には釜山浦における倭軍の大将は【史料2】に明らかなように貞長であり、李友曾の首は少なくとも四月六日の時点で熊川（齋浦）に渡っている。また、この日（四月一〇日）以前の戦闘の記述に国親が現れることはない。

そして、すでに見たように、四月九日頃を境に、倭人の行動が大きく変化している。それまでの大規模な攻勢から撤退・防衛戦へと、方針を転換させてしまうことができるのは対馬島内でも相当の実力者に限られる。守護代である盛親にそれだけの権限があったとみるのは自然なことと言える。現場の倭軍は朝鮮側陣営に肉薄していたから、これらの兵を従わせ、撤収に同意させたことが国親の権威を窺わせる。

以上を踏まえると、国親は講和交渉・撤退を指揮するために朝鮮へ渡ってきた蓋然性が高いと判断できる。釜山浦において講和交渉と住民避難の指揮を終えた国親は、その後、齋浦に移動している。【史料5】国親の乗馬が熊川の戦場で敵將に奪われていることから、彼は四月一九日以前に齋浦へ移動していたことができるのである。四月一九日は前述した通り、全住民避難の最終局面であり、国親は三浦最大の人口を抱える齋浦の撤退戦をも指揮するため、釜山から移動していたものとみられる。

こうした状況から、盛親（国親）の【史料8】書契における「大将」自称は、乱を画策した首謀者としての「大将」ではなく、講和を有利に進めるため、自らが対馬側の意思決定主体たることのアピールのための自称と考えることができる。

国親は朝鮮に渡航して以降、講和交渉を行い、勝ちようとする倭軍を抑えて、撤収へと方向転換させたとみられる。こうした事実を踏まえると、通説のように、彼を挑発の首謀者と考えることは難しいと言わざるを得ないだろう。

D. 宗盛弘 — 撤退戦で討死、高崎大明神となる —

宗盛弘は、宗材盛（義盛の父）の従兄弟にあたり、義盛の祖父貞国の異母兄弟で豊崎郡主を貞国から譲り受けた盛俊の子であると思われる。三浦の乱において没した盛弘は、乱後、対馬で「高崎大明神」として祀られているが、この神格化の背景には四月一九日熊川での撤退戦での盛弘の奮戦があると思われる。

三浦の乱及び高崎大明神宗盛弘に関する日本側の伝承は複数存在している⁽⁴⁾が主要なものから、そのプロットを抽出すると概ね以下ようになる。

- ① 朝鮮貿易において大内氏との接待格差に怒った宗義盛は、「従伯父能登守盛弘」に朝鮮を攻めさせた（あるいは盛弘と共に朝鮮を攻めた）。対馬の軍勢は兵士およそ三百人で海を渡り四月四日に朝鮮に至った。
- ② 本州の人で三浦に住む者を率いて齋浦、熊川城を落とし、李友曾を殺害した。
- ③ 朝鮮軍の反撃により、一九日、盛弘は三一歳で命を落とした（あるいは、「大将義盛千死二入テ一生ヲ得難クゾ見エ」た時に、盛弘が「数十万集ツタル敵中へ割テ入り」、「四角八方へ打散シ」た。その勢いに恐れれた朝鮮軍が引いた隙に、義盛を逃がして船に乗せ、盛弘は防ぎ、ついに討死した）。
- ④ その年の六月から盛弘の霊が対馬豊崎郷高崎の浜に現れるようになったため、里民（対馬国民）は一社を

経営して、高崎大明神と号した（あるいは、霊となって現れた盛弘を憐れんだ義盛がその霊を祀った）。

先までにみた朝鮮側の記録とあわせて考えた時、このような日本側の高崎大明神伝承はどう捉えられるだろうか。

すでに見たように、四月一九日齋浦・熊川での戦いは対馬側にとっては撤退戦の最終局面であった。そして、（1）撤退戦では援護部隊に被害が集中している、（2）非戦闘員の死傷者がほとんどみられない、（3）貨物の避難が成功している。これらをあわせて考えるならば、この日の戦いで討死にした盛弘はおそらく、三浦居留民の避難のため、身を挺して戦い命を落としたものと推測される。のちに対馬で高崎大明神として「住民によって祀られた（あるいは命を救われた義盛が祀った）」という伝承は、撤退戦のさなかに落命した盛弘を英雄視する住民の「記憶」が形として現れたものではなからうか。

この伝承は盛弘の子盛賢（将盛）が島主になったところに形成されたと推測することも可能であろう。島民は撤退に貢献した盛弘を（おそらくは盛親も）評価したものとみられる。

5. おわりに

三浦の乱の主導者が「特送宗盛明および島主代官宗盛親（国親）そして宗盛弘の三将である」とする一五一〇年八月二四日の倭人平次郎（平時羅）の供述が先行研究においては、ほとんどそのまま鵜呑みにされてきた。しかし、三浦の乱の経過やその前後の各人物の動きを注意深く見てみると、いくつかの矛盾点が見え

た。すなわち、

① 齊浦・熊川城を囲む倭軍の大將「去年特送」の四月五日の貞長の証言によると「島主命我等伐釜山浦・齊浦・巨濟等処、不得已来、此非我意也」とあり、釜山における先鋒とみられる貞長は島主（義盛）の命で出兵してきたと明言している。

② 国親が朝鮮に渡った四月九日以降、倭人が妻子や家産を船に積み込み、撤退する方針に切り替わった。【史

料8】の書契に明らかのように、国親は講和交渉を主導し、かつ住民の撤退を指揮した蓋然性が高いこと。③ 平時羅が「三將」として証言した「老屯都老」は宗盛弘は齊浦の全住民避難のために戦い、命を落とした可能性が高い。のちに対馬で高崎大明神として住民によって祀られたという事実はそれを裏付けている。

さらに、そもそも平時羅の証言がなされたのは同年の八月二四日である。つまり、乱の勝負がついて、朝鮮との交渉を再開するため、責任問題を明らかにしなければならなかった段階の証言であることを踏まえねばならない。平時羅が島主宗義盛の手によって派遣された人物であるとすれば、島主に有利な証言を行い、交渉再開の糸口を掴もうとした可能性すらある。

以上のことから、三浦の乱の主導者は通説にあるような盛明―国親ラインではなく、むしろ島主宗義盛であった蓋然性が高い。その動機としては代官国親との競合関係が想定される。三浦の乱が成功し、朝鮮に権益の拡大（復旧）を認められれば、島主にとっては対馬島内での求心力の回復にもつながると考えられるためである。実際に島主により最初に派兵されたのは「去年特送」をつとめた貞長、そして三浦の乱の最中における具体的な動向は不明であるが、特送をつとめていた盛明などの島主近臣であった。盛明が三浦の乱を企画し島主に入寇を勧めた。そして、その結果として、貞長が「島主命」によって厭々ながら出兵してきたのであった。

そして、島主代官宗国親は講和交渉および釜山・齋浦住民の避難指揮のため、宗盛弘は齋浦住民の避難援護のために出兵してきたと見られる⁽⁴⁵⁾。後世、対馬に残る高崎大明神伝承の背景には、四月一九日の撤退戦における盛弘の奮戦と非業の死、それに対する住民の感謝の心があったと考えられるのである。

義盛は乱の直後こそ、守護代国親の責任論を内外に喧伝することで自らの権勢を維持しようとしたが、結局は失敗し没落することになる。そして次代の島主盛長に責任を問われるまでに彼の権威は失墜することとなったのである。平時羅の証言のみを鵜呑みにしては、義盛の意図した冒険主義的な政権浮揚策としての三浦の乱の意義を見落としてしまうことになる。

以上のように三浦の乱を捉えるならば、乱後の責任問題での立ち位置がそのまま、その後の対馬の政治情勢に影響を与えているという関係性が見えてくる。すなわち、挑発者（乱を引き起こしたが失敗し、対馬の島益を失わせた者）と撤収者（全住民避難を指揮し成功させた者）との対立構造がその後の島内政治過程を規定し、前者は没落し、後者は権勢を得たのである⁽⁴⁶⁾。

このように三浦の乱とは、対馬の島内政治と有機的に連関した事件であった。

注

- (1) 長節子『中世日朝関係と対馬』（吉川弘文館、一九八七年）、長節子『中世日朝海域の倭と朝鮮』（吉川弘文館、二〇〇二年）を参考に筆者が作成。
- (2) 戦前に武田勝藏氏や三浦周行氏が、三浦の歴史および宗氏と朝鮮王朝との間に結んだ約条を紹介した（武田勝藏「日鮮貿易史上の三浦と和館」『史学』第一卷第三号、一九二二年。三浦周行「足利時代日本人の居留地たりし朝鮮三浦」同『日本史の研究』第二輯、一九三〇年）。
- 佐伯弘次氏は対馬と朝鮮との関係を論じる中で、一五世紀中〜後期における宗氏による三浦支配に言及し、三浦は対馬島主・対馬島人にとって対馬島の延長にあつたと評価した。佐伯弘次「国境の中世交渉史」（網野善彦他編『海と列島文化』第三卷、小学館、一九九〇年）。
- 村井章介氏は国境をまたぐ地域で活躍する倭人（いわゆる境界人・マージナルマン）の活動（一四〜一六世紀）を知る上で、三浦という舞台に注目し、倭人の活動や、三浦の法的位置などを活写した（村井章介『中世倭人伝』岩波書店、一九九三年）。
- 関周一氏は倭人の海上における活動や三浦の景観を中心に、三浦恒居倭や支配体制に関する考察を行った（関周一『中世日朝海域史の研究』吉川弘文館、二〇〇二年。同『対馬と倭寇―境界に生きる中世びと―』高志書院、二〇一二年）。
- 李泰勲氏は恒居倭の刷還（送還）、恒居倭に対する検断権の行使、恒居倭への課税や、宗氏による恒居倭の支配体制（具体的には倭酋の政治的位置）について、史料を丹念に収集して精密に検証し、従来の見解を修正している（李泰勲「朝鮮三浦恒居倭の刷還に関する考察」『朝鮮学報』第一九五輯、二〇〇五年。李泰勲「朝鮮三浦恒居倭の法的位置―朝鮮・対馬の恒居倭に対する『検断権』行使を中心に―」『朝鮮学報』第二〇一輯、二〇〇六年。李泰勲「三浦恒居倭に対する朝鮮の対応―課税案と課税を中心として―」『年報朝鮮学』第一〇号、二〇〇七年。李泰勲・長節子「朝鮮前期の浦所に関する考察」『九州産業大学国際文化学部紀要』第三四号、二〇〇六年）。

- (3) 中村栄孝氏は三浦の乱の経過復元、および乱の分析をする前提として、基本的な史実や論点を網羅し、以後の研究の基礎を固めた〔中村栄孝「日鮮関係史の研究」上巻、吉川弘文館、一九六五年。同「日鮮関係史の研究」中巻、吉川弘文館、一九六九年a。同「日鮮関係史の研究」下巻、吉川弘文館、一九六九年b〕。
- (4) 以下、前掲注3〔中村一九六五〕、前掲注2〔村井一九九三〕を参照。
- (5) 当時の朝鮮は京畿・忠清・慶尚・全羅・黄海・江原・咸鏡・平安の八道に分けられ、道ごとに行政系・軍事系の官職が置かれた。行政系の道の長官を觀察使という。道のもとに府・牧・郡・県があり、それぞれの長官を府尹（府使）、牧使、郡守、県令（県監）といい、その総称が「守令」である。また、道ごとの陸・海軍の指揮者として、兵馬節度使・水軍節度使各一名がおりその管鎮を兵馬節度使營（兵營）・水軍節度使營（水營）といった。節度使のもとには各地に大小の鎮が置かれ、鎮の指揮官を僉節制使（略称僉使）・方戸・權管といい、その総称が「辺将」である。前掲注2村井〔一九九三〕を参照。
- (6) 前掲注3〔中村一九六五〕七一七頁。
- (7) 後掲注9〔荒木二〇〇七〕。
- (8) 『宗氏家譜』には、一五〇一年、宗兵部国親が宗材盛によって代官に任命されており、国親は後に撰津守と称していることが判明する。「代官」と「兵部」が共通していることから、「盛親」と「国親」は同一人物と考えられる（前掲注3〔中村一九六五〕）。
- (9) 荒木和憲氏は、三浦の乱後に締結された壬申約条が対馬宗氏領国にどのような影響を与えたか、またそれによる島主の求心力低下、および島内での内乱（郡主間抗争）について検証を行った（荒木和憲「中世対馬宗氏領国と朝鮮」山川出版社、二〇〇七年）。
- (10) 荒木氏によれば、「一五〇六年一月段階では材盛は「大殿様」とよばれており、このときにはすでに義盛が家督を相続していたようであるが、もはや義盛には国親の権力拡大の動きを牽制することはできなかった。そして、一五一〇年の三浦の乱におよんでは、義盛は国親や若年の直臣（年少用人）たちの派兵強硬論をおさえることができず、壬申約条の締結という重大な結果をまねいた」という（前掲注9〔荒木二〇〇七〕）。中村氏の国親首謀説を継承した理解であることがみて取れる。
- (11) 前掲注3〔中村一九六五〕。

- (12) 『中宗実録』八卷、四年(二五〇九)四月癸酉(二二日)条に「去丁卯夏、因平時羅還、具由通諭、至今不報。」とある。
- (13) 乱から四ヶ月後にあたる『中宗実録』十二卷、五年(二五一〇)八月辛丑(一八日)条に「慶尙右道助防将金敬義馳啓曰、倭船二隻、自本島出来、到泊于薺浦、乃平時羅等二十一人投降者也。」つづいて、同年八月甲辰(二一日)条に「下倭人平時羅・而羅・三甫羅于義禁府(著者注、王命により大罪人の取り調べを行った朝鮮王朝の官庁)。」とある。
- (14) 『中宗実録』十二卷、五年(二五二〇)八月甲辰(二二日)条「慶尙右道兵馬節度使柳聃年馳啓」。
- (15) 『中宗実録』十二卷、五年(二五二〇)十月乙酉(二日)条。
- (16) 『宗左衛門大夫覚書』永正九年(二五二二)の記事に「七月九日に、ししみ(筆者注・現、対馬上泉町鹿見)に高麗より御渡候、仰候ふんは、急御役人のつのかみ殿(筆者注・摂津守国親)こなたへ御渡候へ、以後之儀、申談候てわゆ(筆者注・和与)仕候すると申候之間、於此方、御評定御座候、」とある。
- (17) 前掲注3(中村一九六五)、前掲注2(村井一九九三)。
- (18) 特に銅鉄が中心であった。その他にも蘇木、胡椒、鐵・硫黄・金などがあつた。
- (19) 前掲注2(村井一九九三)。
- (20) 朝鮮王朝では何度か対馬との外交交渉が計画されたが、いずれも未遂に終わった。一五〇九年四月三〇日には敬差官(王命の布達や民情の視察のため、派遣される臨時の官職)が漢城を出発していたが、対馬島主宗材盛の死去(同四月六日)の報を受けたため、派遣はとりやめとなり、途中で呼び戻された。また、一五一〇年三月には、特使(新島主を吊慰し、前島主を祭するための使い)が対馬を目指したが、まだ発船しないうちに三浦の乱がおこり、対馬に渡航する機会を失っている。
- (21) 材木を採りに加徳島に渡った熊川の人が殺され、物資を奪われた海賊事件。朝鮮側はこれを三浦倭人のしわざとして頭倭を訊問し、敬差官を対馬島に送って海賊禁圧を求めることになった。
- (22) 濟州貢馬船が倭船五艘に襲われた事件。賊十七人は捕えられ、その首は四月四日、見せしめとして三浦にさらされた。
- (23) 一連の事件に関する朝鮮側の対応に業を煮やした倭人らが抗議の氣勢をあげたものとみられる。

- (24) 慶尚道の巨済島で四人の倭人が海賊として斬られた事件。齊浦の恒居倭が出漁するにあたって、金世鈞(齊浦僉使)に近海漁業の規定にもとづいて射官の同乗を要求したが、造船のために手が足りないのを理由にして、これを拒んだので、そのまま巨済島近海に船を出したが、助羅浦万戸にとがめられ、四名の倭人が殺害された。朝鮮側の過失による事件であるとして、三浦倭人の憤りが募った。
- (25) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月己亥(一四日)条。ただし、塩浦における戦闘の詳細は記されておらず、不明である。
- (26) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月癸巳(八日)条。『同』十一卷、五年(二五一〇)四月乙未(二〇日)条。
- (27) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月丙申(二一日)条に「初六日：賊到熊川、裏友曾之頭以示之」とある。後出の【史料8】「今日令公頸、以早船渡对州」の記述等とあわせて考えると、李友曾は四日頃討たれ、六日首が熊川に送られ、一〇日の段階ではすでに対馬に渡っていたものとみられる。
- (28) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月丙申(二一日)条。
- (29) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月己亥(二四日)条。
- (30) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月己亥(二四日)条。六日の段階で友曾の首は熊川に送られていることから、李友曾が討たれたのもこの時期と考えられる。
- (31) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月戊戌(二三日)条。
- (32) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月丙申(二一日)条。
- (33) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月丙申(二一日)条。
- (34) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月丁酉(二二日)条。
- (35) 『中宗実録』十一卷、五年(二五一〇)四月戊戌(二三日)条。
- (36) 対馬の北端に位置する「豊崎郡大浦村」の宗左衛門大夫が天文十四年(一五四五)四月十日に記したものはじめに、三浦争乱後の講和交渉に関する記事があり、終わりに争乱の「こま、安骨浦攻撃の記事がつけ加えられているが、原本は、さらに何枚かあり、その残闕をそろえて写本にしたものであるかもしれない。記事の正確さは『中宗実録』と対照して証拠だてることができる(前掲注3〔中村一九六五〕)。

(37) 史料には「薺浦」とあるが、【史料8】との整合性から、「釜山浦」の誤記あるいは作者の誤認とみられる。
 (38) 国親が対馬で李友曾の首を直接見たかどうかについては確証がないが、李友曾を討ったという一報が国親渡航の契機になった可能性は高いと思われる。

(39) 『中宗実録』十一卷、五年四月己亥（二四日）条。

(40) 前掲注3〔中村一九六五〕。

(41) 『中宗実録』十一卷、五年四月辛丑（二六日）条、柳繼宗馳啓に「賊勢日益張大、輸所掠薺浦・釜山浦糧料雜物於加徳・絶影等島、釜山浦恒居倭奴、亦載妻子・家産、與薺浦賊倭連兵。」とある。

(42) 『東アジア中世海道——海商・港・沈没船——』（国立歴史民俗博物館、二〇〇五年）より転載。

(43) 前掲注3〔中村一九六五〕など。

(44) 代表的な伝承を『大日本史料』永正七年四月四日から引用して左に掲げておく。

〔一〕「寛政重修諸家譜」五〇一
 宗義盛（初盛順、彦七、讚岐守）……是年の春、大内准国王使をたてて朝鮮につかはす、
 ……義盛大に怒り、家臣宗能登盛弘をして朝鮮を討しむ、十九日、盛弘進みて册年等と熊川に戦ひ、従兵とともに討死す、（盛弘討死、年三十一、是年六月対馬の国民これを豊崎に祀りて、高崎大明神と崇む、寛永系図に、能登守盛弘とし、義盛か子盛長の父に係、永正七年、義盛の命をうき、兵を率いて朝鮮をせむ、四月四日、海をわたり、唐位山の城を攻落し、不日にまた江具度儀の城を攻破る、のち進みて、熊川の城下にいたりて、相戦ふ、朝鮮の兵、盛弘を圍むこと雲霞のごとし、盛弘か兵大半討死し、盛弘もまた戦死す、年三十一、其精魂なお生るかことし、同年六月一日、其霊対州豊崎の郷高崎の浜に現す、里民一社を経営して、高崎大明神と号、其宮今に至りてありといふ、）……

〔二〕「宗氏家譜拔萃」

同年春、大内遣使船（約条之外之使船）於朝鮮、準擬于国王殿使、不受宗氏之文引、而直到朝鮮、朝鮮以無宗氏之文引責之、大内使臣告之曰、大内君便鎮西都督、若夫対州亦其管下、何受対州之文引而遣使於朝鮮乎、於是朝鮮不得已而接待之、其後対州遣歲船、朝鮮不接待之、義盛怒之、使從伯父能登守盛弘率兵侵朝鮮、……兵士凡三百人、

同年四月四日、越海到朝鮮、率本州人在三浦者、陷齊浦、熊川城、殺僉使李友曾、朝鮮兵無敢当其鋒者、於是朝鮮以防禦使柳珥年、黃衡為將、起大軍禦之、盛弘知敵強而不可得勝之、與士卒約死、使糸瀨播磨引從卒二十三人帰州報之、再進與柳珥年等戰、同月十九日、盛弘遂墜命於熊川、時年三十一、從兵悉戰死、朝鮮士卒死者六万人、同年六月、建祠於豊崎浜、祭盛弘之靈、号高崎大明神、

〔三〕「北肥戦誌」八 宗讀岐守義盛攻朝鮮国事

永正七年（庚午）四月、対州ノ守護宗讀岐守義盛、同能登守盛弘相議シテ、朝鮮国ヲ可攻ト、兵船ヲ揃テ押渡リ、同四日、釜山浦ノ湊ニ著船ス、折当家朝鮮ニ船ヲ渡ス事、去ヌル嘉吉年中ヨリ以來数十ケ度也、依之、彼国ノ者怯弱ナル事ヲ能知リ透シケレハ、大キニ思侮テ、義盛、盛弘陸へ上ルト均ク、其武備ヲモナサズ、急ニ貝鐘ヲ鳴シ、関ノ声ヲ上、民屋ニ火ヲ懸テ、所々へ打入乱妨ス、斯ル処ニ、朝鮮人何十万トモ不知、十方ヨリ馳集ル事蟻ノ如ク、義盛、盛弘ヲ取圍ミ、半弓不尽弓ヲ雨ノ如クニ射掛ク、兩人案ニ相違シ、手ノ者ヲ左右ニ従へ、前後ヲ下知シテ、打破リ々々馳通ラント働キシカ共、異賊雲霞ノ如クニ込重リ、十重廿重ニ圍ミケレハ、千變万化スレ共力ナク、大将義盛千死ニ入テ一生ヲ得難クゾ見エシ、同名能登守盛弘ハ、軍ノ躰ヲ見テ、是迄ト思ヒケルニヤ打物ヲ捨、火威ノ鎧ヲ一淘ユツテ鎧突シ、数十万集ツタル敵中へ割テ入り、無双ノ大力ナリシカハ、アソコニ押付、一手ニ三人、爰ニ攻臥、一手ニ五人、ヒツ爬々々、四角八方へ打散シケル、其勢ニ異賊恐レテ、少引退キ見エシ間ニ、義盛ヲ遁シテ船ニ乗セ、盛弘ハ防キ、終ニ討死シケリ、生年三十一也、斯リシカハ、対馬ノ軍兵生テ帰ルハ千ニ一ツモナシ、然ルニ同六月ヨリ、盛弘己カ居所ニ在事存生ノ時ニ不異、対州ノ老若男女是ヲ怪ミ、正シキ亡霊ナラント窺ヒ見ルニ、疑モナキ正タル人^{（其カ）}也、偕ハ又実ニ其人歟ト見ルニ、平生ニ食物ヲセサリケリ、野人村老斯ル希有ノ事ハ、前代未聞也ト怖惶ク事大形ナラス、斯リシ程ニ、義盛是ヲ憐ミ、其靈魂ヲ祭り、一社ノ神ニソ崇メケル、今ノ対州高崎大明神是也、……

(45) 三浦の乱の後、盛弘の子盛賢（将盛）が盛長の次の島主になり、国親の子盛廉が盛賢の島主代官として活動している。

(46) このような理解は荒木氏の説との整合性から考えても合理的だと思われる。

Study of The Three Ports Incident (1510, Sampo-No-Ran), through a power struggle of the Sōs.

OYANO, Noriyoshi

The purpose of this study is to clarify who masterminded The Three Ports Incident (also known as *Sampo Warun* (三浦倭乱) or *Sampo-No-Ran*(三浦の乱)), a riots in 1510 by Japanese citizens residing in Korean port cities (*Dongnae*(東萊), *Chang-won*(昌原) and *Ulsan*(蔚山)).

According to the previous studies, *Sō Kunichika*(宗国親), subruler of *Tsushima*(対馬) and *Sō Morihito*(宗盛弘) pulled strings behind the incident.

However, the previous studies based on only *Wajin Heijiro*(倭人平時羅)'s witness on behalf of *Sō Yoshimori*(宗義盛), ruler of *Tsushima*. There was rivalry between *Yoshimori*, and *Kunichika* then.

There are some good reasons for *Yoshimori* was mastermind of incident.

First, after *Kunichika*'s sail over to *Sampo*, a strategy of *Tsushima* army has changed. That is a switch from the offensive to the evacuation. So, there is a strong possibility that *Kunichika* decided evacuate noncombatants from the front line. Thanks to his early evacuation order, most of residents and their property was safe.

Second, *Morihito* died of an evacuation war and he worshipped as the deity by *Tsushima* people. So, the folklore of Great gracious god *Takasaki*(高崎大明神) in Japan based on *Morihito*'s death after fighting to the bitter end and *Tsushima* people's gratitude for his action. Because of these reasons, it cannot reasonably be assumed that *Kunichika* and *Morihito* was masterminded the incident.

Third, the most important point is *Sō Sadanaga*(宗貞長), the leader of the vanguard, testified that *Yoshimori* was

mastermind.

In conclusion, it is likely that *Sō Yoshimori* decided to invade *Sampo* for his power reinforcement. So, *Sampo-No-Ran* was the incident that linked to the political process of *Tsushima* functionally.

(史学専攻 博士後期課程三年)